

【出展のおしらせ】

県の支援を得て、右記の機械要素技術展に出展します。

1. コマ番号：東6ホール 31-27
2. 新発売のグリースの紹介
3. ジャバラ等各種容器へのグリースの詰め替え
4. お越しの際は、是非お立ち寄りください。

日本ものづくりワールド 内	
第16回 機械要素技術展 M-Tech	
会 期：2012年6月20日[水]~22日[金]	
会 場：東京ビッグサイト	
主 催：リード エグジビション ジャパン株式会社	
同時開催：第23回 設計・製造ソリューション展 第20回 3D&バーチャルリアリティ展 第3回 医療機器 開発・製造展	
小間No.	に出展します

「久慈浜物語」1

母の実家は、久慈浜という漁港のある町だった。わたしが住むこの街の情景と似ていた。そこで寿司屋を営んでいた。当時、漁業が活況を呈し街も店も大変賑わっていたと聞いている。

母は、わたしと幼い妹を連れてよく里帰りしていた。妹を背負い綿入り絆纏で包み、わたしの手を引いて目の前の駅舎から上りの常磐線に乗った。

機関車は煙突から黒煙を後方に棚引かせ、私たちに石炭の焦げた匂いとススを見舞った。

汽車が日立駅に近づいていた。車窓に流れる青々とした田園風景は一変し、破壊された建造物の群れになった。米軍の艦砲射撃で全ての窓ガラスが吹き飛び、錆び色の無残な工場群だった。

次の大甕駅からは私鉄に乗り換え、客車ではなく真っ暗な貨車に乗せられた。

さっきまで母の温かい背中であっていた四歳下の妹が、突然暗く

『母の実家』

なったせいか泣き出していた。乗り合わせた乗客が、妹をあやしてくれたが妹は泣き止まなかった。

母が背帯びを解いて背中から下ろし、おっぱいを口に含ませるとまた静かになった。

ホームに着くと年老いた駅員が、表から両開きの重い扉を開けてくれた。暗闇から太陽のまぶしい光の下に降り立った。

『おじさん、ありがとう』

『おう、そんなことも話せるようになったか、大きくなったなあ』
『おじさんも、お元気で何よりです』と、母もやさしく声を返した。

駅からは、妹をおぶったままわたしの手を引き実家まで十分ほどの道のりを歩いた。母の手は、柔らかく温もっていた。

玄関の暖簾をくぐると、わたしの大好きなおじいちゃんが出ていてくれた。

『ターボ、よく来たなあ。どれ、大きくなったかな』と言って、わたしを頭の上まで抱き上げた。

剃り上げられた頭は、穏やかな海のように光っていた。

☆ あとがき ☆



数日前、心待ちにしていた藤城清治の絵が届いた。和歌山と古都・奈良を旅した際、偶然奈良県立美術館で彼の個展が開催されていた。是非見たいと言う妻の声に押されて、渋々入ったわたしでした。

丁寧に描かれた一枚一枚の絵から、味わったことのない深い感動を得た。彼の影絵は斬新でアイディアに満ち、経営に相通じると強く思った。